理事長挨拶

理事長
本庄 照子

本庄国際奨学財団の奨学生及びOB、OGの皆さん、こんにちは。

本庄国際奨学財団は1996年に設立され、2013年には17期生を迎えることになります。卒業生は350名を超え、約3分の2の卒業生は母国、または近隣の国で就職をされて、国や地域の発展に寄与されています。

第1期生17名の留学生を採用し財団の活動を始めた時からこの16年間で日本留学の事情は大きく様変わりしました。文部科学省の掲げた留学生10万人計画は2003年に達成されものの、その後「日本留学」の魅力を失っているのではないか、日本の高い技術は学んでも日本人とのコミュニケーションは難しく、日本の生活や文化を愛してくれていないのではないか、むしろ日本を嫌いになって帰国する外国人もいるのではないか、そんなことがよく議論されるようになりました。世界に誇れるトップクラスの技術や学問があっても、そして日本には世界に誇れる美しい文化があるはずなのに、4年も5年も、もっと長く日本にいても理解してもらえないのは、なぜでしょう。そんな疑問に対する答えを探しながら、日本を好きになってもらいたい、その思いで財団の活動を重ねてまいりました。

日本を好きになってもらうためには、どうすればいいのでしょうか？日本の伝統文化体験の機会を設ける、伝統料理を一緒に食べる、野球など日本や一部の国以外では盛んではないスポーツを一緒に楽しむ、それらもいい方法です。しかしそれらの前提には常にお互いの思いやりの心があると思います。私も時折海外へ赴く機会がありますが、特にアジアを旅行して思うことは、「日本は特別ではない」ということです。良いことにしろ、悪いことにしろ、日本人は他の国とは違う、特別な存在だと思い込んでいないでしょうか。特別に良く経済発展をした、特別に美しい独自の文化をもっている、また逆に、伝統や古い考えを簡単に捨て去ることもあります。しかし本当にそれは正しいのでしょうか。経済発展も美しい文化も、もとを正せば近隣諸国の協力があってこそ、近隣諸国からもたらされたもの、輸入されたものがあってこそ、日本の独自性を開花させることができたのではないでしょうか。

感謝、尊敬、思いやりの心があって初めて、私たちの提供する奨学金や旅行や文化体験の機会が、「日本を好きになった」という皆さんの生き生きとした結果を生み出すのだと思います。

350名の全員にそのような思いが正しく伝わったかどうかわかりません。しかし私たちのつながりは、皆さんが様々な思いを胸に日本を離れたときに終わってしまったのではありません。もしその時からこれまで「終わってしまった」卒業生がいたとしたら、どうぞ今からでもまた私たちと再びつながってください。私たちはいつでも迎え入れることができます。

折にふれ主人の言葉を思い出します。学生たちはみんな本庄ファミリーです。卒業後帰国をしたら日本の良いところを話してほしい、伝えてほしいとよく話しておりました。主人の蒔いた一粒の種が十数年を経て根をはり枝をのばし成長を続けております。皆々素晴らしい学生たちです。これからも温かく見守り応援していきたいと思います。

Contens

01 理事長挨拶
02 SENPAI！インタビュー VOL.1
— キャロ・ステイヴィン・カニヴァ
04 Here, There, Everywhere・ミニ同窓会を開催しました。
05 奨学生寄稿 ── 吉川真由
「結核の遺伝子解析 ～110日間のリサーチインターンシップ in 南アフリカ～」
07 OB寄稿 ── Syed Emdadul Haque
「バングラデシュの障害児 －深刻な問題－」
09 ニューヨークからの手紙－JMSAプログラム受賞者研究レポート－
「日米学生交流プログラムin福島」── プレーガー 亜里紗
10 おひさしぶりです！
～本庄スカラー OB・OGからのメッセージ～
13 2012～2013年度奨学金・研究助成金の公募案内
HISFワークショップ
14 1年間の活動・奨学生ニュース・本庄スカラーの著書紹介・財団の概要
15 16年間の軌跡

カバーデザイン 小渕 暁子

SENPAI！インタビュー VOL.1

第1回目のSenpai！インタビューは、第10期生のキャロさんに登場していただきます。ケニアで生まれ日本留学、コロンビア大学での２年間の研究の後、今年４月から東京大学の博士研究員として再び日本に戻ってきたキャロさん。日本での留学生活の思い出と研究者としての描く将来像について聞きました。

キャロ・ステイヴィン・カニヴァ Kyalo Stephen Kanyiva, Ph.D.

1978年ケニア生まれ。1999年来日。2010年京都大学で工学博士号（材料化学）を取得。2012年4月より東京大学薬学系研究科金井研究室（有機合成化学）ERATO・JSPS研究員。京都大学大学院在学中に本庄国際奨学財団奨学金を受賞（第10期生）。

「ケニア生まれ日本育ち」

ケニアではどんな子供でしたか？

キャロ　毎日兄弟4人で一緒に勉強しました。兄から教えてもらい、また弟へ教える。アフリカでは農業収入で暮らしている家が多いので安定した月収を得るために、子供には良い学校に入れて、良い仕事につかせたいと考える親が多いのです。

その頃の夢は。

キャロ　医者になりたかったですね。子供の時から、病院でもらう小さな薬ひとつで大きな体の病気を治せることが不思議で、とても興味を持っていました。

高校卒業後は。

キャロ　高校卒業後母校の高校の先生をしていました。ある日、叔父さんの知り合いが、日本留学募集の広告を見て私に勧めてくれました。そして日本大使館で試験を受けて7人が選ばれ、来日しました。

来日そして鈴鹿高等専門学校では。

キャロ　1年間東京で日本語学校に通ったあと、三重県の鈴鹿高専に編入しました。鈴鹿では大阪弁、和歌山弁、三河弁とさまざまな方言を話す人がいて面食らいましたね。授業で理解できなかったことは放課後に先生やチューターによく聞き、寮で日本語の専門用語を英語で意味を調べて勉強しました。友人のグループでいつも一緒に遊び、試験の前になると一緒に勉強をしたことがよかったと思います。鈴鹿ではその他にホストファミリーのおかげで日本文化を学ぶ機会も得られたし、お正月やゴールデンウィークには家に招待してくれて寂しい思いをすることがありませんでした。今でも仲良くしてくれています。

そして名古屋工業大学に編入し、京都大学の大学院へ進学しましたね。

キャロ　高専で化学の基礎を学び、名古屋工業大学では応用化学、京都大学大学院では材料化学を専門にしました。京都大学の友人はとても優秀で研究熱心でよく私を引っ張ってくれました。また指導教授の先生は国内外の学会に参加させてくれて、そこで知り合った人脈は私の将来に大きな影響を与えました。多くの研究者とディスカッションすることで刺激を受けて物事の見方も大きく広がりました。

小さな薬が大きな体の病気を治すことの不思議・・・それが化学者としての原点。

化学は好きですか？

キャロ　もちろん好きです。物の変化が面白い。大きい体に小さい薬を入れて病気が治る、それはマジックみたいじゃないですか。そこに面白さを感じます。化学の進歩は創薬以外に農薬、有機材料、バイオテクノロジーや生命化学に大きく貢献しています。自分の研究グループが開発したアイデアやコンセプトが他のグループにも使われると、とてもうれしいことですし、自分が発見したことが社会で使われるようになると励みになります。

京都大学大学院で研究した材料化学について教えてください。

キャロ　有機材料というのは、医薬品、農薬や有機エレクトロニクスなどで、基本骨格が炭素と水素で出来ています。それらの物を作るための効率的な合成方法を研究しました。従来の合成法は環境に有害な物質を生み出し、合成ステップ数も多かった。製作コストと環境への負担を減らすためには違う合成法を考える必要があり、有機化学者の研究対象のホットトピックです。

コロンビア大学では。

キャロ　有機天然物を人工的に作る研究をしました。それは天然化合物を人工的に作ることで、活性を詳しく調べるのと新しい反応の開発が目的です。例えばお茶のカテキンやコーヒーのカフェインの構造を人工的に変えるだけで活性効果も変わって、より有用な分子が作れます。実際にこういった研究で作られる薬がたくさんあります。これも化学です。

東京大学での研究は?

キャロ　京都大学とコロンビア大学で行っていた研究はそれぞれ全く違うことですが、東京大学ではそれらを統合して新しいものを作る研究に取り組んでいます。薬学系研究室で研究しているので、薬やその他の有機材料を作るための効率的な合成法の開発を行っています。

もっと議論しよう。教科書だけが勉強じゃない。
人と会って話すと知識も増える、チャンスもやってくる。

アメリカと日本の研究環境の違いについてどう感じますか?

キャロ　アメリカでは学生にテーマを与えて研究の方法は学生自身が考える、というふうに独自性と責任感を持たせますが、日本では常に先生が研究をコントロールしていることが多く、より丁寧に教えてくれます。アメリカのやり方では力のある学生はどんどん伸びていきますが、力のない者は苦しんでしまいます。そしてアメリカの研究報告会では学生もよく質問をして自分の知っていることをアピールしますが、日本では活発な討論が行われないことが多いです。大学の研究室では学部生のために簡単な質問もしてどんどん答えさせるのも大事と思います。そうでないと知らないことは各自教科書で勉強するしかなくなります。
アメリカと日本はどちらがいい、ということは一概には言えませんが、私が研究室のボスになったら、時間は守る、しかし自由な雰囲気は持たせたいです。

これからの夢は。

キャロ　これからは大学や企業で研究指導者になりたいです。遠い将来には、研究者としての経験を活かしてコンサルタントのような仕事もしたい。母国ケニアと日本のコラボレーション事業があれば意見を求められるような人になりたいです。そのためには知識だけでなく経験が大切でしょう。大学、企業、両方の経験をもってさまざまな観点から物事を見られる人になりたい。

後輩達に向けたメッセージを。

キャロ　「努力すれば報われる」ということを伝えたいです。成功するには運も必要かもしれないが、私は「努力は成功の元」と信じています。もう一つ伝えたい事は、チャンスをつかむことですね。例えば私が日本に留学したきっかけは、叔父さんの友人がたまたま見た奨学生募集の新聞広告でした。コロンビア大学に行けたのは学会で知り合ったベルギーの友人の紹介です。遠いところから突然チャンスが舞い込んでくるので、それをつかむことが大切だと思います。

本庄財団奨学生にアドバイスをください。

キャロ　本庄国際財団から奨学金をいただいたことにとても感謝しています。こんなに留学生の面倒をよく見てくれる財団は知りません。今の奨学生には、日本語を勉強してもっと日本人とコミュニケーションがとれるようになれば日本がより楽しくなると伝えたいです。OBとOGの皆さんとは、せっかく本庄交際財団が私たちを立派になるまでサポートしてくれたので、ネットワークを大切にして研究やプライベートの中でお互いを支えていきたいです。

2009年 京都研修旅行

2007年 博士論文発表会

教育熱心なお母さんの下で4人兄弟が毎晩頭を寄せ合って一緒に勉強していた様子が、目に浮かびます。一人ではない、助けてもらってまた次の人を助ける、そうするとみんなが幸せになることを、子供のころから知らず知らずのうちに実感し、これまで実行してきたのですね。教訓じみた言葉が嫌いなキャロさんのお話から大切な教訓がよく伝わり、とても印象的でした。

Here, There, Everywhere…

2011年〜2012年にみなさんが訪れた世界各地の思い出、日本での活動、住んでいる町を紹介します。

FOOMA JAPAN 2012国際食品工業展でラオスシルクを紹介しました。
16期生 Douangchak Sithixay

上海交通大学との交流プログラムに参加しました。
15期生 Souksivongxay Soulachack

セーヌ川河畔で、旅行に来た父と撮りました。
16期生 根木昭英(パリ第4大学)

モロッコの家で。
兄弟姉妹と甥といっしょに。
15期生 El Azhari Mourad

国際学会でシドニーを訪れました。
14期生 Le Hieu Hanh

ミャンマーのパゴーで。
7期生 Thanda Oo

9月に来たばかりです。
これからここで
4年間がんばります。
16期生 小関宏明
(ケンブリッジ大学)

ミニ 同窓会を開催しました。

モンゴル、ウランバートル
(2012年1月)
〈左から〉Amarbayar Adiyabat(7期生)／Aryal Nabin(4期生)
Amarsanaa Jazag(9期生)
Nabinさんが旅先のウランバートルで声をかけて、実現しました。

タイ、バンコク
(2012年5月)
〈左から〉S. Phongsatorn(14期生)／河島／L. Manakan(6期生)
二人は初対面でしたが、同じ中学校の出身だとわかってびっくり。

バングラデシュ、ダッカ
(2012年5月)
〈左から〉Sultana Nayar(14期生)／河島
Syed Emdadul Haque(14期生)／Lepon Kumer Saha(14期生)
東日本大震災の直後、涙ながらに日本を発った
Leponさんの話を初めて聞きました。

中国、北京
(2012年6月)
〈左から〉王婷(2期生)／黄麗輝(4期生)／王巍(4期生)／劉璐(2期生)
北京在住の本庄スカラーは、年代を超えてとても仲良しです。

薬剤耐性結核菌の遺伝子解析
～リサーチインターンシップ in 南アフリカ～

東京大学大学院新領域創成科学研究科博士課程
吉川 真由

南アフリカの都市、ダーバンにある、HIVと結核の改善に向けた基礎・応用研究および教育活動に特化した研究機関KwaZulu-Natal Research Institute for Tuberculosis and HIV（K-RITH）で2012年3月より110日間のリサーチインターンシップを行いました。そして、現在東京大学で生命科学分野の基礎研究を行う私が、地域的あるいは国際的な健康問題にどのように貢献出来るのか、日本とは状況が大きく異なる南アフリカでの体験を通して考えてきました。

HIVの海に浮かぶ結核という氷山

"If the TB cases seen in hospitals are the tip of an iceberg of TB infection, then the iceberg is floating in an ocean of HIV."（もし病院で見つかる結核患者が、結核感染全体の氷山の一角にすぎないとしたら、その氷山はHIVという海の上に浮かんでいる）は南アフリカのHIVと結核の深刻さを非常に良く現したフレーズです。

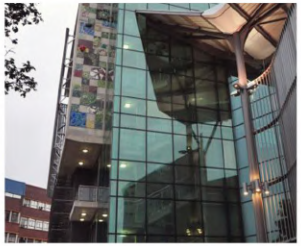
ダーバン中心部の市場

WHOの推計によると、世界人口の1/3にあたる約20億人が結核菌に感染していますが（Keshavjee and Seugn,2008）、大半の人々において結核菌は潜伏状態にあります。約10%にあたる2億人が実際に結核を発症し、そのうち180万人が毎年結核で死亡しています（WHO,2009）。抵抗力が弱まると結核を発症しやすくなるため、免疫不全を引き起こすHIV感染は、結核菌感染者の最大の敵と考えられています。研究によれば、HIV感染者は非感染者よりも50倍も結核を発症しやすいとされ（AVERT.org, 2012）、HIVの蔓延は、結核の蔓延にもつながります。

この「火（結核感染）に油（HIV感染）を注ぐ」現象が、南アフリカで実際に起こっています。例えば、南アフリカの都市ダーバンの一部地域では、若年層の55%以上がHIVに感染していると言われており（UNAIDS,2008）、HIV感染者の結核感染が急速に広まっています。HIVと結核は、南アフリカのみならず、アフリカ諸国の重篤な問題です。

薬剤耐性結核菌の広がり

現在、通常の治療で用いられる薬剤が効かない「薬剤耐性結核菌」だけでなく、耐性結核菌に対する薬剤も効かない「超薬剤耐性結核菌」がアフリカを中心に世界中で出現し、この超薬剤耐性結核菌に感染した患者の死亡率が50%にものぼっているという深刻な状況です（Keshavjee et al., 2008）。また、一口に薬剤耐性結核菌や超薬剤耐性結核菌と言っても、耐性を示す薬剤は異なっており、様々な種類の結核菌に分類することができます。結核菌の種類を速やかに見極め、どの薬剤を用いるべきかを判断することが、こうした耐性結核菌感染者の治療に欠かせません。しかし、現在の診断方法では時間がかかる上、結核菌がもつ遺伝子変異と薬剤耐性との対応関係が十分に調べられておらず、データベース化も不十分です。こうした結果として、耐性結核の治療ガイドラインが確立されていません。



2012年10月に新築されたK-RITH結核・HIV研究所

自分のプロジェクト

そこでK-RITHでは、結核菌の遺伝子情報と薬剤耐性の対応関係を集約したデータベース構築を通して、耐性結核治療のガイドラインづくりを目指しています。その中で私は、次世代シーケンサーと呼ばれる最新の遺伝子解析機器を用いて、これまでの結核菌の遺伝子解析方法を改良するというプロジェクトを受け持ちました。

最初の1ヶ月はプロジェクトの計画と次世代シーケンサーを稼働させるための準備作業を行いました。欧米や日本の研究機関と異なり、南アフリカでは研究に必要な試薬や部品の注文から納品までに数ヶ月もかかることがあるので、事前にしっかりと準備しておかないとスムーズな研究が行えません。次の1ヶ月で、実際に患者さんから採取した結核菌の遺伝子配列を解読しました。実は私は、K-RITHにおいて次世代シーケンサーを利用して実験した記念すべき初めての人間となりました。説明書があるとは言え、数千万円の機械を一人で動かすというのは精神的にも肉体的にも辛い仕事でした。そして最後の1ヶ月で、遺伝子配列データを解析し、結核菌がもつ遺伝子変異を分類し、薬剤耐性との関係について調べました。

臨床患者を通して見えてきたこと

以前から感じていた「何故HIVの広がりを止められないのか」という憤りにも似た疑問への答えが、ダーバンでの生活を通じて、少しずつ見えてきました。

地域医師らによる薬剤耐性結核患者についての会議

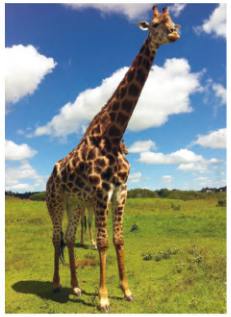
まず、貧しい人達にとっては、日々食べていくことで精一杯であり、生活の「質」まで高めることは難しいようです。南アフリカでは結核とHIVの治療費は国が負担します。けれども、病院に行く際の交通費までは支給されません。さらに、医師や薬剤が慢性的に足りないため、せっかく病院まで行っても治療薬を受け取れないこともあります。こうした状況のせいで、継続的な治療をあきらめてしまう貧困層が数多くいるのです。また、治療を受けることが「自分は病気である」という事実を繰り返し思い起こさせるため、精神的に耐えられないという人もいます。私たちが風邪薬でさえも一週間継続して飲むのが難しいように、自覚症状の少ないHIVに対する薬を、若いうちから生涯にわたって飲み続けることがどれほど大変なことかを想像できました。ほかにも、結核とHIVに同時感染している女性に対して、胎児への副作用が心配されるので治療中の妊娠は避けるように指導しても、妊娠してしまうというケースが多々見られます。南アフリカで聞いたことのなかで、特に印象的だったのはある一人の少女が発した次の言葉です。「私たちはHIVの教育も受けているし、情報も持っているわ。でもHIVはタバコとよく似ているかも知れない。あなたたちだって、タバコが身体に悪いと知りながら、吸い続けるじゃない？」アフリカの人々は何も知らないのではなく、むしろ教育を受けていても、現在の状況に流されてしまうからこそ、HIVや結核が蔓延しているという事実に気づきました。

日々の実験や解析だけでなく、地域医師らによる薬剤耐性結核患者についての会議にも参加しました。私を指導してくれたAlexanderさんはもともと結核の専門医だったのですが、研究者となった今も「結核の深刻さを忘れないように」と定期的に参加されているそうです。

この会議を通して、薬剤耐性結核の治療は現在も手探りであるということを知りました。結核とHIVに同時感染している患者に対し、重大な副作用を避けて、両方の治療を適切に進めることは簡単なことではありません。さらに、薬剤耐性を迅速かつ正確に診断する難しさも目の当たりにしました。例えば、ある結核患者について治療方針を決める際に、「治療方針の参考にしている研究報告が本当に信頼出来ると思うか？」「この患者の結核菌がもつ薬剤耐性については、2つの診断結果の整合性が取れない。診断のミスではないか」と議論される事例が多々ありました。自分の研究が、医師たちによる患者の治療方針、延いては患者の生命に影響を与えると思うと、薬剤耐性診断実験の責任の重さを感じました。

展望

インターンシップでは、薬剤耐性結核が広まっている中、信頼性が高く、迅速で、コスト効率の良い遺伝子解析方法を確立するプロジェクトに従事し、自分の仕事の成果がダイレクトに人の生活や命に関わることに大きなやりがいを感じました。設備やソースが不十分である中で一定期間に成果を出すことを求められたため、実践的な課題解決スキルを身につけることもできました。また、結核専門病院への訪問や地域の医療従事者とのコミュニケーションを通じて、患者の視点についても学ぶことができ、なぜこの社会でHIVや結核がここまで広がったのかということについて深く考える機会を得たのは非常に貴重な体験でした。南アフリカをはじめとする多くのアフリカの国々にとって、HIVや結核などへの取り組みは国家の未来と経済成長に大きく関わる最重要課題です。自分の仕事が人の笑顔に繋がり、また国の未来に繋がるよう邁進したいと思います。



Hluhluwe（シュシュルイ）国立公園

タウンシップ（旧黒人居住区）のひとつ、Umlazi での結婚式にて

吉川 真由 Mayu Yoshikawa

東京大学分子細胞生物学研究所でsmall RNA経路の生化学的解析を行っている。京都大学在学中より国際活動に積極的に参加し、将来は研究者としてグローバルヘルスの改善を目指している。本庄財団国内日本人プログラム6期生。

バングラデシュの障害児 ―深刻な問題―

NPO法人“Bridge of Community Development”の使命

Syed Emdadul Haque, Ph.D.

こんにちは！私はSyed Emdadul Haqueと申します。東京大学大学院医学研究科国際保健学で修士号と博士号を取得しました。来日前にバングラデシュで8年間、公衆衛生に関する仕事に携わっていました。現在はシカゴ大学バングラデシュ研究センター（米国シカゴ大学の姉妹施設）で博士研究員として働いています。私はバングラデシュで、健康弱者や障害のある子供たちのためのNPO法人“**Bridge of Community Development**”を立ち上げました。

背景

障害は生体医学および精神医学上の世界中どこでも見られる問題です。身体的（身体構造、つまり解剖学的身体や染色体の異常などを指す）または精神的（言語、学習、認知不全）な障害あるいはその両方の障害を持った人が、自然な行動がとれない、一般社会で期待される社会的、文化的役割を効率的に果たせないことを指します[1]。こういった障害は、先天性、後天性のものがありますが、軽度から重度まで様々な症状が生涯にわたって継続します。バングラデシュにおいてこの問題は社会的、あるいは経済的なひとつの現象でもあります。つまりバングラデシュでは障害の発生率は、人口過多、極端な貧困、非識字率、認識不足、医療サービスの不足と高い関係性があり、それはバングラデシュが世界で最も人口密度の高い国の一つであることに由来しています[2]。貧困家庭の子供は特に障害を受けやすいのです。

0歳から18歳までの子供の障害には、身体障害、情緒障害、認知障害、社会不適応の障害が見受けられ、現実生活の中で意味のある社会的役割を果たすことができないでいます。バングラデシュではこれが深刻な状況であるにもかかわらず、この問題についての信頼できるデータがほとんど存在しません。就学前から小学生（3～10歳）の障害のある子供は約260万人（2,559,222人）と推定され、実に子供の人口の10%に相当します[3]。JICAが行った調査によると、2,559,222人のほとんどが身体障害（41.5%）、続いて視覚障害（19.7%）、発話・聴覚障害（19.6%）、知的障害（7.4%）、脳性小児まひ（7.0%）、多機能障害（3.4%）、精神病（1.4%）の障害をもっているとされています[4]。

シカゴ大学バングラデシュ研究センター。地域の診療所を兼ねている。

バングラデシュの障害児教育に必要なもの

障害のある子供たちも含めてすべての子供たちは、基本的な教育を受ける権利を持っています。「国連行動計画」要綱には、すべての子供たちはその身体的、知的、社会的、情緒的、言語的、その他のいかなる状況にかかわらず、あらゆる教育のための手段を与えられるべきである、と謳われています[5]。障害は非識字率とも関連します。障害の予防に関する研究によると、障害のある人の70%は読み書きができないとされています[6]。260万人の障害のある子供たちの中で、バングラデシュの社会福祉省が運営する特別支援学校で教育を受けられる子供は1,500人にも及びません。特別支援学校が不足しているためにほとんどの障害児たちは学校に行くことすらできません。特に知的障害と身体障害の両方を持った子供たちは、その教育がおろそかにされがちであることが報告されています。一方、障害を持った子供の不登校の理由の45%は、学校に受け入れてもらえないためとされています。

障害児を持つ親の知識、認知の必要性

障害児を抱える家庭の多くが、社会的、経済的、また子供に教育を受けさせることにおいて困難な状況にあります。そのような家族が子供たちに与える日々の食事や子供の教育の心配をしなくてもすむようにする、または、障害のある子供たちを社会の冷たい視線、あらゆる教育システムに拒否されることから守らなければなりません。こういった問題は障害児に関する親の知識不足や障害児の育児法についての情報不足のために起こっているのです。障害のある子供に未来はない、と親たちは思い込んでいます。しかしまず親が障害児のケア、治療、教育に関する情報をもつことが重要です。

事例：体を伸ばせない男の子

ハフィズは10年前にバングラデシュの農村地域で生まれました。彼は生後2時間、産声を上げませんでした。母乳を飲もうとせず、よだれが止まりませんでした。地域で障害に関する調査が行われたときも、母親はハフィズのことを話さず、2年たってはじめて近所の人がリハビリテーション職員に話しました。職員たちは薄汚れ、極端に痩せて床の上に丸まっているハフィズを見つけました。彼には皮膚病と耳の感染症もありました。母親の許可をもらって職員たちはハフィズにリハビリ処方を始めましたが、これまでのところ症状は大きく改善していません。治療を始めるのが遅く、リハビリテーションの職員たちにはハフィズに必要な一日数時間もの集中的な理学療法を施す時間がありません。ハフィズの祖母の話では、ハフィズの母は子宮外妊娠をしていて、分娩時に子宮膜を破ることができませんでした。出産には不慣れな女性が立ち会い、時間がかかりました。ハフィズはどうしてこうなったと思うか、と尋ねると祖母は、母親が妊娠中に働きすぎたからだろう、それが胎児に悪い影響を与えたのだろうと言いました。ハフィズは生後1か月間、病院で注射を受けましたが、良くなりませんでした。リハビリテーション職員は精神療法も試しました。またベランダの柱に体をぶら下げたり、地面に掘った穴に押し込んでハフィズの体を引っ張ったりといったことを1か月にわたって毎日行いましたが、結局あきらめてしまいました。

バングラデシュの障害児
（本文とは関係ありません）

診療所の待合室

ハフィズの母は、ハフィズと3人の弟、妹たちの面倒を見るために毎日働かなければならず、リハビリテーション職員から教えてもらったハフィズのための訓練を、毎日施すことができません。

NPO“BCD”に期待される役割

社会的な体裁のために、生まれたばかりの障害児に必要な処置が施されないことがあります。障害についての理解が足りないために多くの親たちが子供に障害があるという現実に向き合おうとしません。生まれたばかりの段階では、障害のことを他人に知られることを恥じる場合が多いのです。しかしそれは障害を負った子供にとっては悲惨なことです。親たちは他人に迷惑をかけることを懸念して、障害を持つ子供を医療施設や人々の集会場所に連れて行くことを嫌がるのです。

バングラデシュでは障害を持つ子供の医療や学校にお金がかかり、彼らの面倒を見なければならない親にとって負担になります。障害児の正確な人数の把握と地域の医療関係者に対して障害の兆候と症状を理解させる訓練が必要です。そこで私たちのＮＰＯ“ＢＣＤ”はまずバングラデシュにいる障害児の人数の把握に努めています。そして学校や総合医療センターを設立して、障害のある子供たちに安価に受けられる教育とプライマリーヘルスケア（家庭総合医療）を提供したいと考えています。また地域医療従事者を養成して、その地域の障害児とその親たちを対象とした健康教育をおこないます。そうして障害のある子供たちが教育を受け、これまでに経験できなかった当たり前の生活を送れるよう、手助けをしたいのです。子供たちやその家族が、スポーツやアートの授業を通して自尊心を持てるようなプログラムを開発したいと考えています。

さらに、バングラデシュ政府や国際機関と協力して、親や家族、教員、地域住民、教育委員会、障害を持つ子供たちの友達にも、もっと広く障害児教育や医療について知ってもらうための広報活動を行いたいと考えています。そうして障害のある子供たちが適正な社会福祉、健康保健、心のサポートを受けてみんなと同じ普通の生活に近づけるよう、改善されることを目指します。

障害児の授業風景

References:

1. Verbrugge LM, Yang LS, Juarez L. Severity, timing and structure of disability. Social and Preventive Medicine, 2004; 149: 110-121.
2. World Health Organization, Regional Office for South-East Asia. 2004 basic indicators: health situation in South-East Asia. New Delhi, 2004. (Accessed 23 September 2012: http://www.searo.who.int/en/section1243/section1382/section1386_7309.htm).
3. Lusk MD, Rubina C. Hashemi, and Nazmul M. Early Childhood Education: Context and Resources in Bangladesh. (Washington, DC: CAII, 2002), 8.
4. Country Profile on Disability People's Republic of Bangladesh, (Japan International Cooperation Agency (JICA) March, 2002). http://www.jica.go.jp/english/global/dis/pdf/ban_eng.pdf
5. United Nations standard rules on the equalization of opportunities for persons with disabilities, A / R E S / 4 8 / 9 6, United Nations Resolution adopted by the Genera l Assembly at its 48th session on 90 December 1993.
6. Rozario C. "Prevention of Disability: Impact of Bangladesh Experience", http://www.nfowd.org/symposium2/Abstract.doc

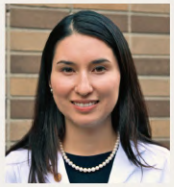
執筆者：

Syed Emdadul Haque, MSc, MHSc, PhD
博士研究員
U Chicago Research Bangladesh
House # 338, Road # 24, New DOHS, Mohakhali, Dhaka-1212, Bangladesh
Email:emdad91@gmail.com, rm_haque@yahoo.com
電話番号：+88-01712047987

ニューヨークからの手紙 ～Honjo-JMSA プログラム受賞者の研究レポート～

現在5つある海外提携奨学金プログラムの一つ、JMSA（米国日本人医師会）との提携奨学金プログラム受賞者からの研究レポートを紹介します。JMSA（Japanese Medical Society of America）は米国における日本人および日系人医療関係者の互助と情報交換を目的に1973年にニューヨークで設立されました。本庄財団ではJMSAと協力して2006年から毎年2～3名の医学生を支援しています。

日米学生交流プログラム in 福島



プレーガー 亜里紗 2012年度Honjo-JMSAプログラム奨学金受賞

日本人の母とアメリカ人の父の間に日本で生まれ６歳まで日本、その後イギリスに６年間滞在の後日本に戻り高校卒業まで過ごす。デューク大学生物学部卒業。現在コロンビア大学医学部２年生。

2011年の東日本大震災の後、私はアメリカでこの災害についての認識を広め、救援活動に携わりたいと考えていました。Honjo-JMSA奨学金の受賞により私が行った活動の一つは、アメリカの医学生が福島へ行き、そこで災害について直に学び、地域のボランティア活動に参加するプログラムの運営を手伝うことでした。このプログラムは今年の夏に日本医学サポートネットワーク（JAMSnet）、米国日本人医師会（JMSA）と福島県立医科大学の協力によって実現しました。私を含む3名の学生が1週間にわたり福島県立医科大学災害医療支援講座で、災害医療とボランティアのセミナーに参加しました。このことは私のように日本との関わりを持つ医学生が、今も継続している救援活動のサポートをするだけでなく、基本的なスキルを身に付けるのに格好の機会となりました。

最初の2日間で、放射線生物学の基礎、過去の原子力災害と福島の現状についてのセミナーに参加し、超音波による甲状腺の検査方法、災害トリアージ、マネキンを使って放射線傷害に対処する方法を学びました。そして次の3日間は災害地を訪れ、直接被害にあわれた方々と行動を共にしました。高齢者のメンタルヘルス福祉センターでは、血圧を測ったり、歌を歌ったり、仮設住宅での生活体験談に耳を傾けました。続いてコミュニティセンターでボランティア活動として仮設住宅に住む方々と接しました。そこでは母親たちが公園の放射線レベルや福島産の農産物の安全性を心配して医師に相談をしていました。また福島第一原発事故除染基地を訪れ、敷地の除染程度や原発の閉鎖について伺いました。原発の閉鎖には数十年を要するとのことでした。最後に津波の被害にあった地域を訪れ、亡くなった息子を追悼して運動公園を建設した一人の父親に会いました。

1週間に及ぶプログラムを通して、災害の広範な影響への理解を深め、この地域で継続的にサポートをすることが必要と感じました。アメリカに戻ってコロンビア大学日本救援協会（CJR）の会合で、学生グループや研究員に対してこの体験を発表したところ、大変良く受け入れられて、故西宮伸一大使にちなんで新設された「西宮フェローシッププログラム」のもと、この学生交流プログラムへの参加を広報する活動が始まりました。来年もプログラム運営のお手伝いをさせていただくつもりです。今後毎年夏に、アメリカの医学生にこの機会が与えられることを望みます。

おひさしぶりです！ ～本庄スカラー OB・OGからのメッセージ～

日本を離れて何年になるかな～？ みなさんお元気ですか？

私たちは母国に戻ってまたは他の国で元気に暮らしています。

日本に留学していたころを懐かしく思い出して、本庄ファミリーの仲間にメッセージを送ります。

From China

1期生
白国棟
Bai Guodong, Ph.D.
(China)
早稲田大学出身

私は早稲田大学での長い留学生活をとおして、日本文化になじんできました。本庄財団のお世話になり、今でも故元会長本庄先生と言葉を交わした風景を懐かしく思い出します。静岡修学旅行でお茶を飲みすぎて、「茶酔」を初体験したことも昨日のことのようです。2000年に中国に帰り、復旦大学で商法を教えています。４年前からは日本の戦後における法律事件の解読という共通科目の講義を開設し、戦後新憲法の解読などをとおして、中国の法制度と対比しながら、日本の法文化を紹介しています。とにかく、日本の文化は大好きです。伊藤園のお茶も大好きです。上海にお立ち寄りの際には、ぜひ復旦大学に遊びに来てください。お待ちしております。

From Korea

1期生
洪炳喆
Byungchul Hong, Ph.D.
(Korea)
東京大学出身

現在ソウルで知的財産関連業界の仕事をしています。アップルとサムスンとの特許訴訟から知的財産権の重要性が一般的に知られるようになってきました。故本庄正則元理事長の激励を受けて研究に専念することができたのは、私の生涯において非常に貴重な経験になりました。私のような立場に置かれた後輩達もそのような経験ができることを願っています。財団の後輩の皆様に、私の経験から小さなことにも最善を尽くすことが大事であるとアドバイスをしたいと思います。終わってみれば、大事でないことは一つもありません。それが積もって人生の大きな財産になるということが、若い頃には分かりませんでした。一日一日を、また物事の大切さを考えて最善を尽くしてください。

From Taiwan

4期生
余建宏
Yu Chien-Hung, Ph.D.
(Taiwan)
東京医科歯科大学出身

私は2002年に東京医科歯科大学歯科矯正学講座で博士号を取得し、現在は台湾台中市の中国医薬大学歯顎矯正科の主任を担当しております。面接で故元本庄会長に優しく声をかけていただいてほっとしたこと、静岡旅行や、財団事務所のコンピューターネットワーク設置のお手伝いをしたことを懐かしく思い出します。台湾に戻った後も伊藤園への恩返しをしなければという思いは一度たりとも忘れたことがありませんが今自分にできることは「お～いお茶」を毎日飲むことぐらいです。家族や知人にも紹介し、皆伊藤園のお茶を飲むようになってくれました。幸い台湾での販売があり、難なく入手でき、思う存分楽しむことができとても幸せです。台湾でも製造されるようになり、このような発展が日本と台湾との親交を深めるにとても役立つと思います。これからずっと伊藤園を愛飲しますよ。愛する伊藤園、一緒に頑張りましょう! To Itoen with Love…

From Nepal

4期生
Aryal Nabin, Ph.D.
(Nepal)
一橋大学出身

日本を去って庭野平和財団・南アジアプログラムに参加してから5年が経ちました。私は本庄財団の援助を受け、開発経済学の博士号を取得しました。今は世界で最も不平等な地域で仕事をしています。BMWを乗りまわす大金持ちがいる一方で、日々の生活にあえぐ人々がいるようなところです。私の仕事は後者の貧しい人々のために適切なアクションプランを作ることです。これは生易しいことではありません。経済学の理論と現実には大きなギャップがあることがわかりました。草の根にいなければ、現実を見ることはできません。今この草の根にいられることが幸せです。私が現役の奨学生に伝えたいこと。理論を会得することは大切ですが、現実を見ることも忘れないでください。最後にこれはかなり確信をもって言えることですが、必ずしも物質的豊かさを求めるのではなく、心から幸せだと思えるような仕事を選んでください。Good luck!!

From China

5期生
劉 穎
Liu Ying, Ph.D.
(China)
筑波大学出身

私は自分の経験も含めて多くの人が不妊治療を受けている現実を知り、日本で学んだ医学の知識を少しでも生かせればと思い、現在上海で日本人向けの不妊治療の病院に勤めています。毎日日本語を使っているので、時々日本にいるような錯覚があります。最近日中関係はぎくしゃくしていますが、早く正常に戻ることを祈っています。

From China

5期生
厳 驊
Yan Hua, Ph.D.
(China)
東京医科歯科大学出身

2007年に中国の上海に戻り、現在、以前勤めていた上海中医薬大学付属曙光病院の生殖医療センターに勤務しております。毎日、不妊症患者さんの診察や治療を行っております 、もちろん研究も続けております、非常にやりがいのある仕事です。
最近上海のお店に伊藤園の"お茶"や"ウーロン茶"などをよく見かけます。財団や前会長のことも常に思い出し、周囲の人にも日本のことをよく話しています。
日本留学の間、たくさんのことを学びました。特に仕事に対しての情熱、真面目さ、努力など。生活の面では、財団を含め、日本の友人や周囲の人々にお世話になりました。いい思い出がたくさんあります。現在、尖閣諸島の問題で日本と中国の関係が冷めています、とても残念なことと思います。我々にできることがあれば……

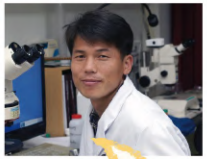
From USA

6期生
張勝亮
Zhang Shengliang, Ph.D.
(China)
東京医科歯科大学出身

東京医科歯科大学を卒業後、現在はアメリカ・ペンシルベニアで研究者をしています。ハーシーという町に住んでいますが、世界で一番素敵な場所ですよ。それでもお寿司、お刺身や伊藤園のドリンク、そして日本いたときに私の身の回りで起こった全ての事が恋しいです。時々、我流のレシピで、寿司、おにぎり、焼きそばを作ります。もちろん東京のお寿司屋さんで食べたお寿司や、旅行の時に河島さんが作ってくれたおにぎりにはとてもかないませんが、子供も妻も喜んで食べてくれます。時に私の作った日本食を食べながら、東京の留学生活の話を喜んで聞いてくれます。子供たちが大きくなって、おーいお茶を飲むたびにきっと父親の話を思い出してくれるでしょう。伊藤園のお茶がこの先も変わることなく、美味しく、芳醇で、ますます爽快にさせてくれる飲料でありますように。

From Korea

8期生
白承鎬
Baek Seungho, Ph.D.
(Korea)
横浜国立大学出身



私は現在、韓国海洋科学技術院(KIOST; Korea Institute of Ocean Science and Technology)で、海洋生物の中でも赤潮を起こす植物プランクトンの生理生態学の研究を行っております。特に、最近の研究テーマは浮遊生物を利用して海洋健康性指数を開発したり、漁業被害を防ぐために赤潮生物を殺す技術を開発したり、海洋生態系のリスク評価などがあります。これからも研究において国際的なレベルに合わせて頑張っていきたいと思っております。また、研究活動を通して韓国と日本との交流を深めて参りたいと思っております。

From China

8期生
Chih Fung Lam, Ph.D.
(Malaysia)
慶應義塾大学出身

みなさん、こんにちは。私は現在、アビームコンサルティングでSAPコンサルタントとして働いています。仕事の関係で数ヶ月前から中国の大連に住んでいます。マレーシアからやってきた私としては大連を旅行したり、様々な国からやってくる同僚達と出会ったりと、とても充実しています。ここでの生活は本庄財団で出会った沢山の留学生たちとの日々を思い出します。この出会いや素敵な友情に感謝してこれからも日々邁進していきましょう!

From Malaysia

11期生
Min Khine Maw, Ph.D.
(Myanmar)
岐阜大学出身

私はミャンマーで医学部を卒業し、2004年に来日して岐阜大学大学院医学系研究科で博士号を取得しました。東南アジアの変化に特に興味があり、2010年からマレーシア・ペナンに移りAUCMS (Allianze University College of Medical Sciences)に所属していました。現在はマレーシアのジョホールにあるNUMed (Newcastle University Medicine, Malaysia)で専任講師をしています。これはイギリスのNewcastle大学の分校です。今は医学教育に携わっています。現在はGuo Meilingと結婚し、MeiminとShanminの2人の娘がいます。

From Vietnam

9期生
Vu Quang Minh, Ph.D.
(Vietnam)
東京大学出身

ベトナムのミンと申します。現在ベトナムで仕事をしています。仕事の内容は電子取引や電子決済をベトナム市場で開拓しています。私の専門は情報処理で、この技術で経済活動とビジネス取引を革新できるように努力します。最近、日本の文化と経済投資がますますベトナム市場に入り込んでいます。スーパーや隣近所で、日本人と会うことは珍しいことではなくなりました。日越の厚い交流を日々肌で実感しています。両国の交流発展に貢献できるように頑張ります。

From Laos

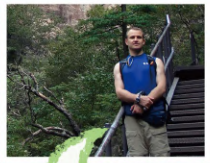
9期生
Onphanhdala Phanhpakit, Ph.D.
(Laos)
神戸大学出身

私は、高等教育・研究のキャリア13年間を日本で過ごし、経済学の博士を取得することができました。昨年帰国しラオス国立大学経済・経営学部に就職し、大学院担当ディレクターを任されています。日本式を土台にして、ラオスの経済発展のために高等教育・研究の量的拡大と質的改善を日々努力していきたいです。他方、ラオス元日本留学会の常務理事、その傘下の神戸大学ラオス同窓会の会長を務めています。日本とラオスとの架け橋になって、両国の友好関係の増進のためにこれからも貢献していきます。

From China

9期生
劉暁玉
Liu Xiao Yu, Ph.D.
(China)
東京芸術大学出身

中国と日本の両国の交流は歴史が長く、一衣帯水の隣邦であります。古く唐代から文化交流が行われました。私は4年前に景徳鎮陶磁学院で就職し、現在、副教授です。
毎日生徒さんに教えたり、自分の作品を作ったり、幸せな生活を過ごしています。将来は中国と日本の陶芸文化の懸け橋となり、両国の芸術文化交流がますます深まるよう努力していきたいと思います。地球上に創造的な人々が私と共にいてくれると思うと心強く感じます。時間があれば、皆さん、景徳鎮に遊びにいらしてください。



From Korea

9期生
Michal Bartko, Ph.D.
(Slovakia)
東京工業大学出身

私の人生において、本庄奨学金を得たことはとても幸運なことでした。世界中からやってきた親友と呼べる仲間が増えました。そして何よりも本庄財団に感謝したいことは博士号を取得できたことです。おかげでさらに良い仕事に就くことができました。私の経験した仕事を列挙してみます。日本に残り博士研究員、アメリカで研究ディレクター、母国・スロバキアの大学で助教授、そして韓国で特任教授。面白い、いいね、と思う人もいるでしょう。しかし私にとってこれらは単なる「探索」でしかありません。皆さんもそうではありませんか?腰を据えるまでの「探索」です。つまらないメッセージで終わる前にもう1つだけ。私がこの「人生の探索」をしている間に経験から学んだことがあります。それは「がんばるしかない!」ということ、そしてできるだけいつも笑顔を絶やさずに。

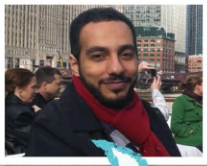
From Myanmar

8期生
Kay Lwintun, Ph.D.
(Myanmar)
東京大学出身

現在、ミャンマーのヤンゴン大学水圏生物学部で魚の養殖や魚病に関する研究をしています。政府が変わって、今のヤンゴン大学をAUN-QA systemに上げようとしています。30年間ぐらい上げようとしてなかったので、直さなければならないところが多く、私はそのチームリーダーになって毎日のように会議がありますが、これからの学生たちのために良い大学にしてあげたいので頑張っています。長い留学生活を楽しく送るためのキーポイント:①人に優しくしてもらったときは自分も幸せなので、自分からも人に優しくしてあげることを忘れないで下さい。②自分が好きで選んだ研究だから辛いことがあっても続けてください。一歩ずつ行くといつか良い結果が必ずでてきます。③研究も大事ですが、時間を作って財団のスーポツ大会、会議、旅行、研究室の飲み会などにできるだけ参加してください。せっかく日本へ来たのですから勉強だけではなく、自分の世界を広げるチャンスをつかみましょう。沢山の国の人々に出会って、色んな経験を試して下さい。留学の意味ももっと分かって楽しくなるでしょう。

From Egypt

12期生
Alaa Mabrouk Omar, Ph.D.
(Egypt)
神戸大学出身



私は心臓の専門医です。2年間、心臓カテーテルと心エコーの最先端の研修を受けた後、心臓医学の博士号を取得しました。日本で学んだ1番大切なことは日本人の真面目さです。それがゆえにエジプトと日本の文化の違いに苦しんだ時期もありました。私から後輩の皆さんへ一言:もし何か困難にぶつかったり、気持ちが沈んだり後悔した時はもう一度考え直して、我慢して、そして新しいスタートを自分自身で見つけてください。この国は色々なことを試す価値のある場所です。私が良いサンプルです。今の私がいるのは、そうやってきた結果です。

2013〜2014年度奨学金・研究助成金の公募案内

奨学金プログラム

- **外国人留学生奨学金（第18期生）**
  【対象】日本の大学院に在籍中または入学予定の外国人留学生
- **国内日本人大学院生奨学金（第9期生）**
  【対象】日本の大学院に在籍中または入学予定の日本人学生
- **海外留学日本人大学院生（第17期生）**
  【対象】海外の大学院に在籍中または入学予定の日本人学生

海外提携プログラム

- Jack Lewis Scholarship Program（南カリフォルニア大学）
- Professor Misawa Scholarship Program（ハワイ大学）
- JMSA Scholarship Program（米国日本人医師会）
- JAA Scholarship Program（ニューヨーク日系人協会）
- CUSSW Scholarship Program（コロンビア大学）

研究助成金プログラム

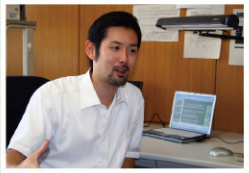
- **食と健康研究助成金**
  【対象】健康維持に対する食品あるいは食品成分の効果を、ヒトを対象とした試験あるいは代替試験法によって明らかにしようとする研究に対する助成。

※募集期間等募集に関する詳細は、ホームページで公表します。申請書類もホームページから取得してください。
※海外提携プログラムは、各提携先の大学または団体において募集・選考を行います。
詳細は本庄財団のホームページに掲載されている、各大学または団体のホームページをご覧ください。

HISFワークショップ

2011年より、OB/OGを講師に招いて講演会をおこない、現役奨学生とOB/OGが交流を深めるシリーズを始動しました。
これからも多彩なさまざまな分野の講演会を年2回開催の予定です。

第1回 2011年7月3日
講師：**香坂 玲**（4期生）
環境問題と科学
〜生物多様性の議論と科学と社会の対話〜



第2回 2011年11月20日
講師：**Housam Darwisheh**（10期生）
権威主義体制と大衆運動
：エジプトの事例から

第3回 2012年7月8日
講師：**唐 成**（4期生）
世界金融危機後の中国経済
〜内需拡大は可能か〜

facebookに参加しよう！

Honjo International Scholarship Foundationのグループアカウントで財団からのお知らせや、本庄スカラーからの研究・仕事に関する情報、国の情報、プライベートでの活動の情報、質問、募集、意見などを活発に発信・交換しています。ぜひリクエストを送ってください。

https://www.facebook.com/groups/HISFhonjo/

名簿の作成にご協力ください！

ホームページで名簿を作成しています。
連絡先お知らせフォームから情報をお送りください。
名簿のページへ入るためのIDとパスワードは本庄スカラーのみにお知らせしています。財団事務局へお問い合わせください。

https://hisf.or.jp/update/form.html

2011−2012 1年間の活動

7 July
2011年7月3日
第3回OB会・ワークショップ vol.1

2011年7月23日
第2回東日本大震災
復旧ボランティア（気仙沼）

8 August

2011年8月20日
第3回東日本大震災
復旧ボランティア（気仙沼）

9 September

2011年9月17日〜19日
京都研修旅行

11 November
2011年11月20日
第4回OB会・ワークショップ vol.2

12 December

2011年12月28日
忘年会

3 March

2012年3月 9日 スポーツ大会
2012年3月17日 第5回OB会in京都
2012年3月28日 歓送迎会

4 April

2012年4月30日
BBQ大会

5 May

2012年5月13日
修士・博士論文発表会

6 June

2012年6月22〜23日
静岡研修旅行

7 July
2012年7月8日
第6回OB会・ワークショップ vol.3

奨学生ニュース

Lahiruさんが優秀論文賞を受賞

指導教授の
北垣浩志教授（左）と
Lahiruさん

Lahiru Jayakodyさん（鹿児島大学連合農学研究科博士課程、財団第16期生）が国際微生物学連盟主催の国際学会International Congress on Yeast 2012でOutstanding Scientific Presentation Awardを受賞しました。
4年に一度開催される酵母の研究では世界で最も権威ある国際学会の一つで、約200ある発表の中で3人が選ばれ、国際的に名誉ある賞です。
Lahiruさん、おめでとうございます！

本庄スカラーの著書紹介

「知っておきたい知的財産活用術
— 地域が生き残るための知恵と工夫」 ぎょうせい 2012年10月
香坂玲著（金沢大学人間社会環境研究科准教授、財団第4期生）

TPP参加や電子書籍で知財事情はどう変わる？
地域資源を守り、財産として活かす方法は？
知的財産のツボをわかりやすく解説。

「東アジアにおける後発近代化と社会政策
— 韓国と台湾の医療保険政策」 ミネルヴァ書房 2011年4月
李蓮花著（滋賀大学経済学部特任准教授、財団第5期生）

韓国と台湾の医療保険政策を事例に、後発近代化と民主化が東アジアの社会政策にもたらした特徴を明らかにし、日本を含む東アジア社会政策論の可能性を展望する。

「中東政治学」 有斐閣 酒井啓子編 2012年10月

第3部第2章「エジプト政治の民主化と社会運動」を
Housam Darwisheh（アジア経済研究所、財団第10期生）が担当。
中東の主要な国々の政治変動を、政治体制、社会運動、国際政治の側面から説明する。

財団の概要

【名　称】公益財団法人本庄国際奨学財団
【英文名称】Honjo International Scholarship Foundation
【設　立】1996年12月25日
【理事長】本庄照子

【目　的】
この法人は、学術研究への奨学援助および研究助成を行い、もって我が国と諸外国との教育・学術・文化における交流及び相互理解を促進するとともに、人材の育成及び教育・学術・文化の発展に寄与することを目的とする。

第1回忘年会 ―故小渕元総理がゲストに。
The 1st Year-End Party
– With former late Prime Minister Mr. Keizo Obuchi as a special guest

伊藤園浜岡工場前 ―今も全く変わらない風景です。
At in front of Ito-En Hamaoka Plant – The view remains the same…

お料理大会では女性が大活躍 ―東京国際交流館(お台場)で。
Cooking Contest with the ladies
– Tokyo International Exchange Center in Odaiba

筑波大生のガイドで筑波山に登りました。
Climbing the Mt. Tsukuba.
―With students from University of Tsukuba as a mountain guide

16年間の軌跡 Journey of 16 years

1期生から16期生まで想い出の写真を集めました。懐かしい顔が見つけられますか?
Pictures from 1996-2012. Find someone looks familiar!!

1996 1997 1998 1999 2000 2001 2002 2003 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 2012

この年の忘年会には議員1年生の小渕優子議員の姿が。
The Year-End Party
―With the freshman Diet member Ms. Yuko Obuchi

故本庄正則会長の優しい笑顔が懐かしいです。
With former late chairman Mr. Masanori Honjo.
―His friendly smile brings back memories

福島県南会津のサマーキャンプ。
Camp in summer, in Minami Aizu, Fukushima

京都で合気道体験。
Aikido experience – From Kyoto Trip

工場見学の帰りに忍野八海で日本一の富士山を堪能。
After the Ito-En Plant Tour (at Oshinohakkai, Yamanashi)
―Enjoying the great view of Mt. Fuji

野球チーム
「グリーンソックス」始動。
Launching the Baseball Team,
"Green Sox"

静岡工場見学後の清水港クルーズ
Shimizu Port Cruise – From Ito-En Plant Tour

京都建仁寺で坐禅を体験しました。
Zazen experience at the oldest Zen Temple, Kenninji, Kyoto
– From Kyoto trip